

一八八四年十月十一日(土)

ドツキネーシヨル  
南神村における聖ラーマクリシユナと信者たち

ドツキネーシヨル  
南神村でヴェーダーンタの学者やイシヤンたち信者と共に

今日はキリスト暦一八八四年十月十一日、土曜日。タクールは南神村のカーリー神殿内の自室の小さい木製ベッドの上で横になって横になっておられる。時間は先ほど午後二時を打ったところ。床には校長とプリア・ムクジエーが坐っている。

校長は学校を一時に出て、南神村のカーリー殿に二時に着いたのである。

聖ラーマクリシユナ「ジャドウ・マリツクの家に行ったらね、すぐに、『馬車賃はいくらですか』と聞くんだよ！ いっしょに行った誰かが、『三タカニアナだ』と言うと、今度はわたしに向かつて聞く。またまたマリツク家のシユクル・タクールが、そつと馭者ぎよしやに聞いている。馭者は、『三タカ四アナだ』と言った(一同笑う)。そしたらまた、わたしらのところにとんできて、『あの一、馬車賃はいくらとおっしゃいましたっけ?』と言う。

仲買人が来ていてね、それがジャドウに、『ブラバザールに4カタ(250<sup>00</sup>)の売地があります。お求

めになりませんか?』と言っている。ジャドウは、『値段はいくらだ? もっと安くならないか?』なんて言っている。わたしが、『お前は買うつもりないんだらう。ただ、暇つぶしに値切っているだけさね、ちがうかい?』と言ったら、わたしの方を振り向いてニヤニヤ笑った。俗っぽい連中はいつだってこうさ。おおぜい人が出入りすれば、世間に自分の名が広まると思っっているんだ。

ジャドウがアダルの家に行ったということで、わたしが又、『お前、アダルの家に行ったそうだね。アダルがとても喜んでいたよ』と話しかけた。するとこうだ——『いやア、いやア、喜んでいましたか。そうですか?』

ジャドウの家にマリック一族の者だという男がきた。大そう利口で、しかも嘘つきだということが目を見たらわかったよ。目をじつと見ながらわたしは言っただけだよ——『利口過ぎるのはよくないよ。カラスも大そう利口だが、他のものの糞を食べて死ぬのさ!』それから、彼が福の神から見放されていることがわかった。ジャドウのお袋さんはびっくりして、『ババ、あなたは どうして、あの人が一文無しだということがわかったんですか?』と言った。顔つきを見てわかったのさ。

ナランが来ていて、彼も床の上に坐っている。

聖ラーマクリシュナ「(プリヤナートに) えーと、お前のとこのハリはいい青年だね」

プリヤ「そうですか、どこがそんなにいいのでしょうか? まだほんの子供で——」

ナラン「自分の奥さんのことを、お母さんと呼んでいますよ」

聖ラーマクリシュナ「ホウ! わたしでさえ言えないのに、彼がお母さんと呼んでいるのかい!

(プリヤに向かつて)——わかつたろう、あの子はもうちゃんと心が静まって、神様の方に向いているんだよ」

タクールは別の話に移られた。

「へムが何と言ったか知ってるかい？　バブラームに、『神だけが真実在で、ほかは皆、虚仮だ』と言ったそうだよ(一同笑う)。いや、いや、本気でそう言ったんだ。おまけに、このわたしを自分の家に招待してキールタンを催したいとも言ったそうだ。でも、それはしなかった。あとで、『私が横太鼓やカルタル(小さいシンバル)に合わせて歌などうたつたら、人は何と批判するだろう』と言っていたか——。人から気でも狂ったのかと思われるのを心配したんだらうよ」

〔ゴシユバラの女性がハリパダをゴバーラ扱いにしていること——子供の頃からの離欲と女性〕

「ハリパダはゴシユバラの女にとつつかまってしまった。逃げ出せないんだよ。ひざの上のにのせて、ものを食べさせてくれる、なんて言ってる。ゴバーラ(クリシユナの幼名——つまり幼いクリシユナ)のように思ってくれているんだとさ！　わたしが、さんざ忠告してやったのにね。母性愛だというがね、その母性愛ってやつが往々にして危ないものになる。」

知ってるだろうか？　女の人からはうんと離れていなけりゃいけないんだよ——神をつかもうと思つたらね。何か下心のあるような女の人のところに入りしたり、殊に、手で食べさせてもらつたりするなんて、とても悪いことだ。そういう女は、男から靈性を奪ってしまう。

よくよく注意をしていれば、信仰を持ちつづけていける。バヴァナートやラカールたちがある日のこと、自分たちで炊事をしていた。出来上がって、さて食べようとする、パウル（ヴィシユヌ派の吟遊僧）が一人来てそばに坐って、いっしょに相伴しうばんさせてくれと言う。余分のないから、もし残ったらあなたにとっておいてあげよう、とわたしと言った。腹を立てて行ってしまった。ヴィジャヤの日（ドゥルガー祭の最後の日）には、誰もが誰にでも手で食べさせてやるが、これはよくない。心のきれいな信者の手からだけ食べるべきなんだ。

女の人のところでは、よくよく気をつけるよ。ゴパール・バーヴァ（幼子わらわこへの母性的な態度）なんか見せたとしても——そんなもの本気にするな。女はくれてやれば、三界のすみずみまで食い尽くす。おおぜいの女が健康そうな若者や美少年を見ると、新しいワナを仕掛ける。これが彼らの言うゴパール・バーヴァなんだ！

子供のころからの離欲——つまり、子供時代から神を求めて夢中になって探し回るような人たちは、初めっから俗世間に呑みこまれない人たちは、ある一つの特別なグループに属しているんでね！ 生まれながらの、ほんものの霊的貴族（高級霊）なんだ。離欲の気持ちをはつきり定まっていれば、女の人から五十八ト（約25m）ぐらい離れて暮らす——自分たちの霊性がこわされないようにね。もし女の人につかまってしまったら、もう生まれながらの霊的貴族でいられなくなり、霊格が下おちて低いグループに入ってしまうからね。子供のころからの離欲の傾向をもっている人たちは、とにかく高いグループなんだよ。とても精神が純粹なんだ。体にシミ一つないようなものだ」

〔官能克服の方法——女性の態度での修行〕

「情欲を克服するにはどんな方法をとる？　自分が女の気分になっちまえばいい。わたしは長い分長の間、神の侍女の態度<sup>グ</sup>をとっていた。女の着物をきて、飾りをつけて、ベールをかぶって——ベールをかぶって献灯<sup>アヒラテイ</sup>をしたものさ！　そうでなかったら、どうして自分の妻を八ヶ月もそばにおいておくことが出来ただろう？　夫婦二人とも、大実母<sup>マ</sup>の侍女<sup>グ</sup>なんだよ！

わたしは自分を男だと言えない。ある日、前三昧<sup>ペーヅ</sup>になったら、(妻が)こう聞くんた——『私は、あなたの何にあたるんですか？』わたしは答えた。——『欲喜<sup>ヨウキ</sup>の大実母<sup>マ</sup>(アーナンタマイ)だよ』

ある見方によると、胸に乳房があるのが女性だそうだ。アルジュナとクリシュナの胸には乳房がなかった。シヴァ礼拝の意味がわかるかい？　シヴァリングを拜むことは、母性と父性を拜むことだ。信者はこういって拜むんだよ——『タクール(神)よ、どうぞ二度と再び肉体をとって生まれませんように——』。血と精液の間を通って、母の胎内を通って、二度とこの世に生まれませんように——』  
(訳註——シヴァリングはシヴァ神を象徴する像であるが、男性器と女性器の結合を女性器の内側から表現した形をとっている)

**聖ラーマクリシュナがくり返し、くり返し、禁ずること——女性を伴つての修行<sup>サウダナ</sup>**

タクール、聖ラーマクリシュナは女性的態度についての話をしておられる。プリヤ・ムクジエー氏、校長、ほか数人の信者たちが坐っている。ちょうどそのとき、タゴール家の家庭教師がタゴール家の

息子たちを連れて入室し、席についた。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに) 聖クリシュナが頭の上にも飾っている孔雀の羽——孔雀の羽には女陰ヨウニの印があるんだよ。つまり、聖クリシュナは女性フアラリテイを頭の上にもせていなさる。

クリシュナはゴピーたちの輪踊りワラサの中に入りなさる。でもそこでは、女性フアラリテイの態度を取られる。だからごらん、輪踊りワラサの中では、あの御方はいつも女の服装ナリをしてなさるよ。自分が女性の状態にならなければ、女性たちの中に入る資格はない。女性の状態になれてはじめて、輪踊りの中にも入れるし、ふざけて遊ぶこともできる。でもね、修行の途中では念には念を入れて、よくよく気を付けなけりゃいけないよ！ 修行時代は女の人から遠く遠く離れていなけりゃだめだ。たとえどんなに信心深い女の人であつても、あんまり近づいちゃいけない。屋根に上がるとき、フラフラしちゃだめ。フラフラしていると足を踏み外して落ちるからね。足弱な者は、しっかりハシゴにつかまりながら上がらなくてはいけない。

シツダ(完成した)の境涯カミになつたら話は別だ。至聖カミを見た後は、そんなに恐れることはない。おおかたのものは恐こわがる必要がなくなるんだ。屋根に上がつてしまえばいいんだ。上がつてしまえば屋根の上で踊ることもできる。階段の途中じゃ踊れないがね。それにそれ、いままで捨ててきたものも、屋根に上がつてしまえば捨てなくてもよくなるよ。屋根も、煉瓦レンガとセメントと煉瓦粉が材料、そして階段も、それと同じものが材料なんだから——。あれほど警戒した女の人が、至聖カミを見た後は大実母バガヴァテの化身イとして感じられる。そうなれば、その方々を母なるものと見なして拜むようになる。そ

れほど恐こわくなくなる。

つまり、こういうことさ——鬼ごっこで、鬼にさわってから好きなことをしろ、と」

〔瞑想ダイヤーナのヨーガ、聖ラーマクリシュナ——内を向くこと、外を向くこと〕

「外を向いてる状態のときは、粗大なものを見る。そのときは物質アンチマヤ・コルシャの鞘カウチン・シカールに心が住んでいる。その次が精妙スークシュマ・シカールの体——象徴リリグ・シカールの体だ。意マノマヤ・コルシャの鞘ウツジュニヤナマヤ・コルシャに心が住んでいる。その次が原因カウチン・シカールの体——心が原因体に入つてくると、歓喜よろこび(アーナンタマヤ)の鞘コルシャに心が住むことになる。これがチャイタニ

ヤ様の半意識境だ。そのあとで心が消えてしまう。心というものが無くなってしまふ。大原因マハーカールナに溶けこんでしまふ。心が無くなってしまえば、もう報告することもできない。これがチャイタニヤ様の深奥境だ。

深奥境というのは、どういうものかわかるかい？ ダヤーナンダが言っていたが、奥座敷に入つて窓と戸を閉める！。一ぱん奥の部屋には、誰でもが入れるわけではない。

わたしはランプの炎になぞらえたものだ。赤い色のところが粗大スルクシュ、中の白いところが精妙スルシュ、一番奥の黒い芯カールナ・シカールのようなところを原因体カールナ・シカール、というふうにな。

瞑想ダイヤーナが正しくいつている特徴しるしがあるんだよ。その一つは頭に鳥が止まること。鳥はその人を右かなんか(無生物)と間違えて止まるんだよ」

「以前の話し——ケーシャブにはじめて会ったときのこと（一八六四年）——瞑想中のケーシャブ——目を開けていても瞑想ができる」

「ケーシャブ・センにはじめて会ったのはアーデイ協會サマージでだった。壇の上に何人か坐っていて、ケーシャブはその真ん中にいた。丸太ン棒のように動かなかったよ！ わたしやシエジョさんにこう言った——『見ろ、あの浮きを、魚がエサを呑みこんでしまった！』あの瞑想の力があつたから、神の思召しであれほどの名声を希のぞみのままに得られたんだよ。目を開けていたって瞑想はできる。話をしているも、それでも瞑想はできるんだよ。考えてみる、虫歯があつてズキズキ痛んでいる人のことを！」

タゴール家の家庭教師「はあ、それはよくわかります。はははははははは」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハハ、そうだともさ。虫歯があつたって用事はみんなするさ。でも、心は痛むところに集中している。だから、瞑想は目を開けていても、話をしながらでもできるんだよ」

家庭教師「神は、墮落した者の救い主」と言われています。だから、私共は希望をもつて頼り信ずるのであります。神は慈悲深い御方です」

「以前の話し——シーク教徒とクリシュナダース氏との話し」

聖ラーマクリシュナ「シーク教徒も、神は慈悲深いと言っていた。わたしは、『何故、あの御方が慈悲深いのかね？』と言ってやったよ。すると彼等は、『決まってるじゃありませんか、お上人！マブール』

神は我々をお創りになつて、我々のためにこれほど色々の品物を創造して下さい、我々を育てて下さ



り、我々をいつも危険から守って下さるのです』と言った。で、わたしは言ったよ——『あの御方はわたしを生んで、食べさせて下さる、それがそんなに大そうなことかね？ お前さんたちに、もし子供がいたら、近所の人がきてその子を養ってくれるのかい？』

家庭教師「はあ……。では、ある人は何の苦もなくすぐ成功し、ある人はいくら努力しても成功しない、これは何故でございますか？」

〔ララさんとラーニ・バヴァーニーの離欲——前生サムスカラからの傾向でサットヴァ性を持つ〕

聖ラーマクリシュナ「わかるかな？ おおかたは、前生から受けついできた力(サムスカラ)で成功するんだよ。他人の目には、突然、成功するように見えるがね。

一人の男が、朝方たった一杯の酒を飲んで、すっかり酔っぱらって千鳥足になった！ 人々はびっくりする。たった一杯でどうしてあんなになるのだろう？ だが、ある人が言った——『ナニ、夕べから一晩中飲みつづけていたのさ』

ハヌマーンは黄金の都ランカーを焼き払った。人々は仰天した。一匹の猿が来て、何もかも焼いてしまった！ でも、こうも言った——『ほんとう実際は、シーターのため息とラーマの怒りで、この町は燃え落ちたんだ』と。

それから、ララさん(原義註し)を見てごらん。——すごい金持ちだ。前生からの善い受け継ぎがなかったら、どうして急にあれほどの財産を捨てられるかね？ それから、ラーニ・バヴァーニーだ。女性ではあ

るが、あれほどの智識と信仰をもっている！」

〔クリシュナダースのラジヤス性——世界のために役立つことをする〕

「生まれ更<sup>か</sup>わりの最後の誕生になると、サットヴァ性をもっていて、心は至<sup>か</sup>聖にひかれる。あの御方を慕って気もそぞろになり、世間のいろんな仕事から心が離れてしまう。

いつか、クリシュナダース・パルが此処へ来た。見るからにラジヤス性だ！ でもヒンドゥー教徒だから、履物は外で脱いで入ってきたよ。ちょっと話してみると、中身のない男だということがわかった。『人間の義務<sup>つとめ</sup>とは何だ？』ってきいたら、『世のために役に立つことをすることです』と答え

（訳註1）羅刹王ラーヴァナに捕らえられたシーターの救出のためにランカーに渡ったハヌマーンだったが、ラーヴァナに捕まってしまう。ラーヴァナはハヌマーンの猿としての誇りである尾に火を付けてランカーの街を引き回した。しかし、ハヌマーンは鎖を解いて脱出し、尾に火が付いたまま、家から家、宮殿から宮殿へと飛び移ったので、ランカーの街は燃え落ちてしまった。ハヌマーンの尾の火が原因で大火になったのだが、そこに至った原因はシーターのため息とラーマの怒りであった。——ヴァールミーキ作『ラーマヤーナ』第五卷第十八章——

（原典註1）ラー・バープはベンガル人の誇りである。バイケバラのクリシュナ・チャンドラ・シンハが本名で、若い頃から離欲の思いが強く、年間七十万タカの収入があったが、三十才の時に一切の富を捨ててマトゥラーに移り住んだ。四十才のとき托鉢生活に入り、四十二才で亡くなった。彼の妻、ラーニ・カティヤニーには子供はなかった。彼の師<sup>うし</sup>、クリシュナダース・ババジは、『バクタ・マラー』をベンガル語に翻訳した人物である。

た。わたしは言ったよ——『えーと、世の中の役に立つって、お前はいつたい何様だい？ お前が役に立たなきゃならんほど、この世界はちっぽけなものなのかね？』」

ナランが入ってきた。タクールは大喜び。ナランを小寝台のわきに坐らせた。体を手でさすっておられる。甘いものを食べさせておやりになる。おまけにいとも優しい声で、「水を飲むかい？」とお聞きになる。ナランは校長の学校の生徒だ。タクールのところへ行くのが悪いといって、家で時々殴られるのである。タクールはやさしく笑いながら、ナランにおっしゃる——「お前、革の上着を着るといいよ。そうすりゃ、叩かれてもさほど感じないから——」

タクールはハリシユに、「水ギセルを吸おう」とおっしゃった。

〔婦人といっしょに修行することをタクールはくり返し、くり返し禁ずる——ゴシュパラのやりかた〕  
 タクールはナランに向かつておっしゃった——「ハリパダと例のニセ母さんが来たよ。わたしはハリパダにうんと注意したんだがね。あの女はゴシュパラの奴なんだ。わたしが、『お前さん、誰か相手があるのかい？』と聞いたたら、『ハイ、何とかチャクラバルティです』と言っていたつけ。

(校長に向かつて) アーハー、先だつてニーラカンタが来たね。すばらしい境地だよ！ また日を改めて来ると言っていた——歌をきかせにね。今日はあつちの方で踊りをやっているんだが、なあ、見に行ったらどうだ！ (ラームラルに) 油がきれているよ。(油壺を見て)——ほれ、ツボに油が入っていないよ」

ブルシャとブラクリティの融合——ラーダーとクリシュナとは？——根元創造力アディヤンシャクティ

〔ヴェーダーンタの学者、ダヤーナンダ・サラスワティー、オルコット大佐、スレンドラ、ナラン〕  
タクル、聖ラーマクリシュナはぶらぶらと歩いておられる。部屋のかなを行ったり来たり、時には南のベランダに出られたり、そうかと思えば西の半円ベランダにちよつと立ちどまって、ガンガーを眺めたりしておられる。

〔周囲まわりの環境 (Environment) の善し悪しによる影響——絵、樹、子供〕

間もなく、小寝台にお坐りになった。時計は三時を打った。信者たちは再び部屋に入ってきて床に坐った。タクルは小寝台の上に坐つて黙つておられる。時々、部屋の壁の方をちらりちらりと眺めていらつしやる。壁には沢山の絵がかかっている。タクルの左側にはヴィーナパーニ (サラスワティー) の絵。少し離れてニタイとガウルが信者たちといつしよにキールタンを踊っている絵。タクルの正面にはドウルヴァとブラフラーダの絵と大実母マカーリーの絵姿。右側の壁には大実母マのもう一つの相すがた、ラージャラージェーシュワリー (女王の中の女王) の絵姿。背後の壁にはイエスの絵がかかっている——溺れるペテロを救い上げているイエスの——。タクルは突然、校長に向かつておっしゃった——「なあ、サードウヤサンニヤーシンの絵を部屋に置くのはいへんいいことだよ。朝起きたときに他の人の顔を見ないで、先ずサードウとサンニヤーシンの顔を見て起きるのはいいことだ。イギ

リス風の絵を——金持ちや、藩王ラジヤや、女王クイーンの絵や、女王の息子の絵や、西洋の男女が散歩している絵なんかを壁にかけておくのは、ラジャス性の人がすることだ。

朱に交われれば赤くなる。だから、飾つてある絵によつても影響をうける。それに人間というものは、自分によく似た性質の仲間をさがすものだよ。大覚者パラマンサたちは、二、三人の子供をそばにおいておく。そばに来させるんだが——五つか六つくらいのをね。大覚者パラマンサの境地では、子供といつしよにいるのがとても好きなんだよ。子供は、サットヴァ、ラジャス、タマスどの性質にも支配されていない。樹を見ると草庵いおりを思い出す——聖仙リシが苦行をしていることを思い出して精神こころが奮い立つ」

シンテイからきた一人のバラモンが部屋に入ってきて、タクールにあいさつをした。カーシーでヴェーダーンタを学んだ人で、太っており、いつも笑えみをたたえている。

聖ラーマクリシュナ「やあ、どうしていたんだい？ ずいぶん長いこと見えなかったねえ」

学者「はッはッはッは、野暮用やぼに追われていまして——来ようと思う時にはいつも、都合が悪くなりましてね」

バラモンの学者は座バンディットについた。タクールと話をはじめた。

聖ラーマクリシュナ「カーシーに長いこと居たそうだが、どんな様子だったか、すこし話しておくれ。ダヤーナンダ(原典註)のことを、すこし聞かせてほしいね」

学者「ダヤーナンダに会いましたよ。あなたもお会いになったでしょう？」

聖ラーマクリシュナ「ずっと以前、会いに行つたがね。そのときは、川向こうの別荘にあの人はい

たよ。ケーシャブ・センが来るという日だった。あの人はチャタク鳥が水をほしがるように、ケーシャブを待ち焦がれて気もそぞろだった。大学者だがね。ベンガル語のことを、ガウルの言葉だ」と言っていた。神々の存在を認めていたよ——ケーシャブは認めていなかったのに！ 神はこれほど多くの物をお創りになったのだから、神々だってお創りになれぬ筈はない！ と言っていたよ。だが、無相の神も信じていたがね。大佐が、ラーマ、ラーマ」と称えていたら、あの人（ダヤーナンダ）はこう言った。「それより、お菓子、お菓子」と言った方がマシだ」と（訳註、サンデシユ——チーズ入り砂糖菓子）

学者「カーシーで、学者たちがダヤーナンダと大議論をいたしました。最後には皆が彼に反対しましてね、あんまり大騒ぎになったので、彼はもう逃げ出すより手はなくなりまして。皆がいつせいに大声をだして叫び出したのです——『ダヤナンデン、ヨデユワトン、トツデヨム（サンスクリットで、ダヤーナンダの言ったことは全部馬鹿げている」という意味）』

〔聖ラーマクリシュナと神智学——彼等は神を求めることに熱心か？〕

それから、オルコット大佐にも会いました。彼等（神智学者）は皆、マハートマ（超人、この場合は高級霊）

（原典註2）ダヤーナンダ・サラスワティー（1821～1883）。一八六九年にカーシーのアーナンダバグで大論争を行った。一八七二年の十二月から一八七三年の三月にかけて、カルカッタにあるタゴール家のナイナル別荘に滞在していた。その時に、聖ラーマクリシュナ、ケーシャブ・セン、及びキャプテン（ヴィシユワナート・ウパッター）と会っている。たぶん、キャプテンがタクールにお会いしたのも、ちょうどこの頃である。

の存在を信じています。月の世界、太陽の世界、星の世界というものがあって、ストクシユマ・シャリョ精妙ニキソフイ体(幽体)で、そういう場所に行けるとか——いろんなことを話していました。そうそう、先生、あなたは神智学をどうお思いになりますか？」

聖ラーマクリシュナ「信仰を持つということ、これ一つだけが何より大切なことなんだ。——神への信仰！ その人たちは信仰を求めているのかい？ それならいいがね。至聖カミをつかむことが目的ならしいよ。月の世界、太陽の世界、星の世界、それからマハートマ(超人 高級霊)、そんなものをついでまわったところで神は探し当てられないさ。あの御方の蓮華ミの御足を信仰できるように、修行も必要だし、熱心にあの御方を呼ばなければなりません。いろんなものから心を引つ込めて、あの御方に向けないけりやいけない」

こうおっしゃって、タクルはラームプラサードの歌をうたつて下さった——

わが心、君を求めて

暗き部屋を手さぐりて狂いあがく

すべてを忘れるほどの愛なくして

どうして君をつかめよう

君を求めて、秀れた尊いヨーギーたちは

今も昔もヨーガの修行にはげむ

その心が目覚めたならば

神の磁石は鉄の私をつかまえる

それからね、お経を読んでも、哲学を勉強しても、ヴェーダーンタを研究しても——そんなところにはあの御方はカケラほどもいなさらんよ。あの御方を慕って命がけにならないと、ちっとも進歩しない

六派哲学でも及びもつかぬ

ヴェーダ、タントラ、万巻の経でもなく

信仰と愛の香ぐわしく甘い

水だけを飲んで飲む永遠の君よ

神を求めて熱心にならなくちゃいけない。まあ、この歌をお聞き——」

ラーターを見ること 誰でもできるか

一八八三年十二月十四日に全訳あり



〔神アヴァターラの化身たちも修行サイダナをなさる——人の手本——修行すれば見神〕

「修行することがどうしても必要だよ。何もしないで、突然、見神できる筈がない。

ある人が、『どうして私は神を見ることができないのでしょうか？』と聞いた。それで、心に浮んでくるままに言ってきたよ。大きな魚を捕るなら、それ相当の用意をしなけりゃ——餌をつくって、釣り糸と竿さきの準備をしる。餌の匂いで、深い水底から魚さかなが上がってくる！ 水の揺れ方で、大きな魚がそばまで来ているのがわかるだろう。

バターを食べたいと思う。牛乳にバターが含まれている、牛乳にバターが含まれている」と口で何べんも言ったところでどうなる？ せつせと働いて、牛乳からバターをとらなけりゃならん。神イマは在います、神は在います」と言っただけで、神さまに会えるかい？ 修行サイダナが要いるのさ！

宇宙バガヴァティの大実母マタ自身も五つの頭蓋骨の上に坐って、きびしい修行をなすつた——人々に手本を示すためにね。聖クリシュナは完全なブラフマンそのものなのだが、あの御方でさえラーダー・ヤントラを見つけた後で苦行をなすつた——人々を導くためにね」(訳註、ラーダー・ヤントラ——ラーダーを象徴する神秘的な図像)

〔ラーダーこそアデイヤシャクティ、或いはプラクリティ——プルシャとプラクリティ、ブラフマンとシャクティは不異おなじ〕

〔聖クリシュナはプルシャ(真我)、ラーダーはプラクリティ(根本物質)、つまりチットシャクティ——

根元創造力だ。ラーダーはプラクリテイ——つまり三性質グナの権化だ！ この御方の中に、サットヴァ、ラジャス、タマスの三性質がある。玉ネギをむいていくと、はじめに赤黒い皮、その次が赤だけ、その次に白い色がある。(訳註——インドの玉ネギは日本のものと少し異なる)

ヴィシユヌ派の經典にはカーマ・ラーダー、プレーマ・ラーダー、ニティヤ・ラーダーについて書いてある。カーマ・ラーダーはチャンドラヴァリー(聖クリシュナに淫らな態度を見せたゴビー)、プレーマ・ラーダーはシユリー・マティー(ラーダー)、ニティヤ・ラーダーはクリシュナの養父ナンダが膝ひざにゴバラを抱いて見なすつたもの。

このチットシャクテイとヴェーターンタで言うブラフマン(プルシヤ)は不異おなじだ——水と、水の冷やす力のように。水の冷やす力を考えると、必ず水のことと頭かぶに浮ぶ。また、水のことを考えると、必ず水の冷やす力が心が心に浮ぶ。ヘビとヘビのうねりだ。ニヨロニヨロしたうねりを考えると、必ずヘビを思い出す。では、どういう時にブラフマンと呼ぶか？ ソレが無活動のとき、または活動と無関係なときだ。人が着物を着ても、裸のときと同じ人だ。裸だったが着物を着た——また裸にもなる。ヘビには毒があるが、ヘビにとつては何の害にもならぬ。咬まれたものにとつては毒になる。ブラフマンそれ自体はすべてのものに無関係だ。

名と形のあるところ、そこにプラクリテイ(根本物質)の力と豊かさとよかさがあらわれている。シーターはハヌマーンにこう言った——『かわいい少年こどもよ！ 私の一面がラーマなのよ。一面ではシーターになっているけれどね。一面がインドラ、また一面ではインドラ妃インドラニ、——一面がブラフマー、また一面が

ブラフマー<sup>ニ</sup>、——一面でルドラ、もう一面でルドラ<sup>ニ</sup>になつてゐるのよ』すべての名と形はチツトシヤクテイの顯現<sup>をわれ</sup>だ——瞑想も、瞑想する人も。自分が瞑想してゐるのだ、という感じがある間はチツトシヤクテイの領分<sup>に</sup>に在るのだ。(校長に向かつて)これらのことをよく理解しろ。ヴェーダやブラーナを聞いて、あの御方が言つてゐることを実行しなけりやいけない。

(バラモンの学者に)時々サードゥと付き合うのはいいことだよ。人間は、世俗という病氣にとりつかれてゐる。サードゥと付き合うとずいぶん軽くなる」

「ヴェーダーンタの学者への教え——サードゥとの交わり——自分のものはこの世に誰もいない」  
——召使いの態度

「私と私のもの。神様！ あなたがすべてのことをしてゐる。そして、あなただけが私のもの。家屋敷も、家族も、親戚も、友だちも、みんなあなたのもの。世界は全部あなたのもの。一切合切あなたのものです！ ——これこそ正しい智識だ。これは皆、私がしてゐる、この私が主人なんだ、そして私の家屋敷、私の妻、私の子供、私の友だち、私の仕事——こういうのが無智だ。

師<sup>グル</sup>が弟子にこのことを教えていた。神だけが自分のもので、ほかは誰一人、自分のものではない。弟子は不服そうに言った。『でも先生、私の母と妻は、大そう私の世話をよくしてくれます。もし私がいなければ、母や妻の人生は真つ暗闇になつてしまふでしょう』師<sup>グル</sup>はおっしゃる。『それは錯覚といふものだよ。誰もお前のものじゃないという証拠を、私のはつきり見せてあげよう。この丸薬を

持つて家にお帰り——。家に着いたら、それを飲んで寝ていなさい。ほかの人はお前が死んだと思うから——。しかしお前は、体は動かなくても意識は普通にあつて、何でも見えるし聞こえる。私はその時、お前の家に行く」

弟子は言われた通りにした。家に帰って丸薬を飲んで、意識を失つた様子で倒れた。母親、妻、家ものものはみな、嘆き悲しみはじめた。ちようどそこに、師グルが医者に変装してやつてきた。事情をすっかり聞いて、この医者は言った。

『なるほど、なるほど、いや、心配はご無用、ここに薬がありますから生き返りますよ。でも、一つだけ条件があつてね！ この薬は先ず誰か身内の人が飲んで、その後で病人に飲ませなければなりません！ 先に飲んだ身内の人は、残念ながら死ななければなりません。それで、と、ここには病人のお母さんも奥さんもおいでの方だから、この中で誰か一人、きつとお飲みになるでしょうね。そうすれば大事な息子さん生き返るのでありますから——。』

弟子は何もかも聞いていたんだよ！ 医師は先ず母親に呼びかけなすつた。母親は悲しみのあまり床に転げまわつて泣いていた。『お母さん！ もう泣かないでもいいですよ。あなたがこの薬を飲みさえすれば、息子さんは助かるんですから——。でも、あなたは亡くなりますがね』母親は薬を手にとつて考えはじめた。長いこと考えたあげく、泣き泣き言った。『先生、私にはまだこのほかに息子や娘がありましてね、私がああ世に行つてしまつたらどうなることか——。誰があれたちの面倒をみて、食べさせたり将来のことを心配したりしてくれるでしょう』

医者は次に、妻を呼んで薬を渡しなすつた。妻も精一杯泣いていたが、薬を手にすると、やおら考へはじめた。その薬を飲めば自分は死ぬのだと聞いていたからね。やがて、泣きながらこう言った。『この人は、こうなる運命だったのですわ。私が死んだら、私の幼い子たちはどうなりましょう？ 誰があれたちを育ててくれます？ 私はどうしたってこの薬を飲むことはできませんわ』そのとき、弟子の飲んだ薬の効き目は消えた。彼は今こそ、誰も自分のものではないということを理解していた。彼はいそいで寢床からとび起き、師ズルといっしょに出ていった。師ズルはおっしゃった。『お前のものはただ一人——神様だけだよ』

だからさ、あの御方の蓮の御足に信仰をもてるようにすることだ。あの御方こそ、まちがいなく自分のものなんだから、とことん好きになるように努力する——それが何より一番いいことなんだ。世の中のことを見ろ、ホンの二日ばかりのものじゃないか。内容なかは、何もないんだ」

〔家庭人はすべてを捨てるわけにはいかぬ——知識ジュニヤーナ分別では入れなくても信仰バクワなら入れる〕

学者「はっはっはっは、まったくです。此処ツァイラギヤに来ると、いつかきつと完全離欲ツァイラギヤを實行しようという気になります——世を捨ててしまおうという気に」

聖ラーマクリシュナ「いや、どうして捨てなきゃならないんだ？ あなた方は心で捨てることだよ。世間のことに無執着になつて暮らすことだ。

スレンドラが、此処ツァイラギヤに時々泊まっていきたいからって、寢台を一つ持ちこんだ。足かけ二日もいた

ら女房かみえがやってきて、『昼間はどこに行ってもかまいませんが、夜は家にいてもらわないと困ります！』と言った。こうなりや、スレンドラはどうしようもあるまい？ もう、夜泊まっっていくことははっとご法度はつとになった！

それからね、頭で考えるだけじゃ、どうにもならないよ。あの御方に熱中すること、あの御方を好きになるように努力しなけりやね。知識ジュニヤイナ分別は、家の外庭までしか行けない男のようなもんだ。信仰バクティは女で、奥の間ままで入って行けるのさ。

一つのはっきりした態度を用意しなけりやいけない。そうして、神様をつかむんだ。

サナカのような聖仙リシたちは平安な態度（シヤインタ）をとつていなすつた。ハヌマーンは召使いの態度（ダーシヤ）をとつていた。シユリー・ダーマ、スターマのようなヴラジャの牛飼いたちは友だちの態度（サツキヤ）だった。ヤショルダーは母親の態度（ヴァツツアリヤ）で——神様は自分の子供だと思つていた！ ラーダーは愛人の態度（マドゥラ）だ。

『ねえ、神さま！ あんたはご主人、私は召使い』——この気持ちでいるのが召使いの態度だ。修行の段階では、この態度が大そうよろしいね』

学者「おっしゃる通りです。はい」

イシャンへの教え——バクティ・ヨーガとカルマ・ヨーガ——智慧のしるし

シンテイの学者は帰っていった。夕暮れになった。カーリー神殿で神々に献灯する鈴のひびき

こえて来た。聖ラーマクリシユナは室内の神々に合掌礼拝なさる。そして、小寝台に坐つてうつつりとしていらつしやる。数人の信者たちが入ってきて、また床の上に坐つた。部屋はシーンとしている。夕暮れから一時間ほどたった。イシヤン・ムコバツダエとキシヨリーが入つてきた。彼等はタクルにあいさつをして座についた。イシヤンは、聖典に書かれてあるプラスチックヤラナ(供物を捧げながら称名するヴェータに定められた儀式のような儀式行事を非常に熱心に実行している。つまり、イシヤンはカルマ・ヨーギーなのである。やがて、タクルは話をはじめられた。

聖ラーマクリシユナ「智識、智識とくり返すだけでどうなるものかね？ 智識を得た特徴が二つあるんだよ。第一は熱中アスラーガすること。つまり、神様が大好きになることだ。ただ、智識、智識と分別ツァイヤールばかりして、神に対する愛が芽生えない場合は、その智識は間違いだ。も一つの特徴は、クンダリニーの力が目覚めること。クンダリニーが眠っている間は智識は生じない。坐つて本ばかり読んで、あれこれ頭で考えてだけいて心に情熱がないようなのは、智識の特徴しるしじゃない。

クンダリニーの力が目覚めると、パーヴァ、バクティ、プレーマが生じてくる。これこそバクティ・ヨーガだ。

カルマ・ヨーガは大そうむずかしい。あれをやると、何ほどかの力を得られる——神通力がつくんだよ」(訳註、カルマ・ヨーガ——この場合はイシヤンのような聖典に書かれてある儀式行事を行うこと)

イシヤン「私、ちょっとハズラーさんのところにまいります」

タクルは黙つておられる。間もなくイシヤンが再び部屋の中に入ってきた。ハズラーもいっしょ

である。

タクルルは相変わらず黙って坐っておられる。ややおいて、ハズラーがイシヤンに話しかけた。「行きましょう。この方は今、瞑想をなさるようだから——」イシヤンとハズラーは出て行った。

タクルルは黙っていらつしやる。よく見ると、本当に深い瞑想に入っておられるのである。それから、手の指を使つて称名をなさつた。そのあとで、手を頭の上ののせ、次いで額に、次いで喉に、胸に、さいごにおへソのあたりに——。

聖ラーマクリシュナは、六チヤクラでアディヤシャクティを瞑想しておられるのだろうか？ シヴァ・サンヒターなどの經典にでているヨーガの方法はこれなのか！

ニヴリッテイ  
離欲の道——神をつかめば仕事は去る

〔イシヤンへの教え——立ち上がれ、目覚めよ——カルマ・ヨーガは困難〕

イシヤンはハズラーと連れだつてカーリー堂の方へ行つた。タクルルは再び深い瞑想に入っておられる。夜七時半ころ。この間にアダルが着いた。

間もなくタクルルは大実母マカーリーを拜みに行かれた。拜んだあと、大実母の蓮華の御足に供えてあつた花を取り上げ、ご自分の頭にお乗せになつた。大実母マにごあいさつして、周りまわりをぐるりとまわつてから、チャマラマ（ヤクの尾でつくつた扇様のもの、神像を扇ぐために寺院で用いる）を手にとつて大実母マに風を送られた。タクルルはすっかり法悦に酔つていらつしやる！ 外に出るとき、イシヤンがコーシャク



シ(礼拝に用いる銅製の水差しと匙)を持って、夕<sup>サンデー</sup>の行をしているのがお目にとまった。

聖ラーマクリシユナ「(イシヤンに向かつて) 何だ、お前さん、来ていたのかい? 毎日の勤<sup>おつとめ</sup>行か、

ひとつ、わたしの歌をお聞き——」

法悦に浸りきった様子で、タクールはイシヤンの横にお坐りになり、甘い美しい声でお歌いになる——

ガヤー、ガンガー、プラバースヤ

カーシー、カーンチーに行かずとも

カーリー、カーリー、カーリーと呼んで

わたしや最期の息をひく

朝 昼 晩にカーリー呼べば

祈<sup>いのり</sup>禱<sup>つとめ</sup>も勤<sup>い</sup>行も要りはせぬ

勤<sup>つとめ</sup>行はあなたのそばまで行くが

決して一<sup>いっしょ</sup>体になりはせぬ

慈善、誓願、賜<sup>かく</sup>りもの

そんなものには目もくれず

この世の愛をひとまとめ  
大実母の御足に捧げよう

一八八二年十月二十八日に全訳あり

聖ラーマクリシュナ「夕拝などの毎日の勤行はいつまでする？ あ御方の御足に信仰がもてるま  
でだ。あの御方の名をとえながら目から涙がこぼれて、体の毛が逆立つようになるまでだ。

ブラサードは言う――

ブラサード――ベンガルの詩人、ラームブラ

私は信仰と解脱の両方に頭を下げる

サード

カーリーはブラフマンに不異と知つて

正と不正のすべて捨てる

実がなると花は散る。信仰が生まれて神をつかんだら、そのときは夕拝などの毎日の行事は去つて  
ゆく。

家では、嫁が胎に子をもつと、姑は仕事を減らしてくれる。十ヶ月ともなれば、家事は一切させ  
ない。子が生まれると、嫁は赤ん坊をだいて乳を飲ませるだけで、もう他の用事はない。神をつか  
んだら、夕拝などの勤行は捨てられていく。

お前、そんなにのんきに太鼓を叩いていたんじゃ何にも出来ないよ。強い離欲をしなけりや。

十四ヶ月を一年にかぞえるようなことをして何が出来る？ 力も、勇氣も、まるで持ち合わせがないようだね。働きが<sup>はたら</sup>ないんだ。牛乳に浸した押し米だ。もっと活動しろ！ フンドシをしつかり締めろ！ だからわたしは、あの歌が嫌いなんだ！ 〃ハリにすがれ、兄弟よ、そうすりや、いつかは救われる。そうすりや、いつかは救われる〃——好きじゃないねえ、わたしは。ここ一番、思い切った離欲<sup>ワライキヤ</sup>が必要<sup>だいじ</sup>なんだ。ハズラーにもわたしはそう言っているんだ」

〔聖ラーマクリシュナとヨーガの真理——女と金がヨーガの障害物〕

「どうして自分は力強い離欲<sup>ワライキヤ</sup>が出来ないのでしょうか、と聞くつもりかい？ それにはワケがあるんだよ。心に欲<sup>ホシ</sup>なんかがあるんだ。ハズラーもそうなんだ。郷里<sup>きょうり</sup>で田んぼに水を引くとき、田んぼのぐるりに畦<sup>あぜ</sup>が作つてある。水がもれないようにね。土で出来た畦<sup>あぜ</sup>だから、ときどき穴があいてることがある。穴だよ。身をすりへらすようにして水を引いてきても、その穴からもれてしまうのさ！ 欲はその穴だ。お前は称名もしたり、戒律も守つたりしているにはちがいないが、見えないところに穴がある。その欲の穴からみんな洩れてしまうのさ。

魚をとるのに竹のワナをかける。竹はまっすぐなのが当たり前だ。だが、ワナをつくるときは何故曲げる？ 魚をとるためだ。欲は魚だよ。だから心が世間の方に曲がる。欲がなければ、心は自然とまっすぐになってピンと上を向く——神様の方角にね。

どういうものかわかるかい？ 秤<sup>はかり</sup>の針のようなものだ。女と金の重みがあるから、上の針と下の針

が重ならないのさ。それでヨーガの道から外れるんだ。ローソクの炎を見たことがあるかい？ ほんの僅かわずの風でも揺れる。ヨーガという状態はローソクの炎——風のないところの炎だ。

心というものは、とかく散らばる——ある部分はダツカに、ある部分はデリーに、また一部はコーチピハールに行っている。その心を集めるんだ。一つの場所を集めるんだ。十六アナの布ヌがほしければ、布地屋に十六アナちゃんと払わなけりゃいけない。ちょっとしたジャマがあってもヨーガは成功しない。電線が一ヶ所切れていても電信は通じない」

〔トライローキヤの信念の力——無私の仕事をせよ——私のマ——と言って無理強じいしろ〕

「そりゃ、お前は世間で暮らしているが、それがどうした。仕事の結果を全部、神様に捧げることができるだろう。自分では何の果報も期待するな。

でも、一つ言っとくがね、信仰への欲は、欲のうちに入らないんだよ。信仰を欲しがること、信仰を得るために祈ること——これはいいんだよ。

信仰のタマスを実行しろ！ 大実母マに無理強じいしろ！

母と息子の訴訟ごとに

ポーツとなってラームブラサードは言う

私を平安にして抱きとってくれたら

私はあんたとのケンカをやめるよ。

トライローキヤが、ある時こんなことを言っていた——『私は、この世に生まれたときから、財産の分け前を持っているのです』と。

お前にとって、自分のほんとの母親なんだよ——あの御方は。さあ！形式だけの母親かい？  
母<sup>はは</sup>かい？ 正真正銘の生みの親だ！これにねだれないようなら、いったい誰にねだつたらいいのかね！ こうだ——

マーよ 私は八月児<sup>やつきご</sup>ではないぞ

八月児——未熟児、ふつう弱虫で怖がり

赤い目をしてにらんでも

私はちつとも恐くない

主シヴァの証文をちゃんと持っているから

こんどこそ主の前に訴え出て

きつと勝訴の判決をいただく

自分を生んだ母親だ！ うんとねだれ！ そこから生まれてきたのだから、そこに引きつけられるのは当り前だ。母親の血が自分のなかに流れているんだから、母親の方にどうしようもなく引きつけ

られるんだよ。ほんもののシヴァ信者は、シヴァの血を受け継いでいる。その人のなかにシヴァの因子(性質)が入りこんでいるものだ。ほんもののヴィシヌメ信者には、ナーラーヤナの血(性質)が入っていていく。それに、最近はまだ世間の仕事をしなくてもすむんだらう。何日か、あの御方のことだけを想ってみる。この世には何一つないということがもうわかつたらうから——」

タクールは再びあの甘い声でお歌いになった——

心よ 考えてもごらん

誰一人 お前のものなんか いやしない

あわれなものよ

この仮の世を空しくさすらつて

マートー 幻の網に捕まっているのだから

母なるダクシナ・カーリーを忘れるな

ダクシナ・カーリー——右手を上げて、恐れるなと勇気を与えてくれる女神様

命かけて愛した妻も 死の時が来れば

お前について来ることはない

不吉なもののように

死ひくろから顔を背けるだろう

ご主人様と言って敬うやまつてくれるのも

まあ、二、三日くらいのもよ

時つなる主が来れば すぐに

消え失せる命とも知らないで……」

〔調停、指導、病院、施療所などに対する欲、人望、学識に対する欲、これらはみな初歩の段階〕  
——おしゃぶりを捨てたとき神をささる

「それから、お前のやつてる調停とか指導とかいう仕事、ありや何だい？ 人の争いごとを解決したりして——。皆がお前のことを調停人に行っているそうだね。ずい分長い間やっているんだろう。そういうことは、したい人にさせておけ。今お前は、自分の心をもっともつとたくさんあの御方の蓮の御足に捧げる。ランカーでラーヴァナが死んだら、ベフラが悲しんで泣いたつということわざがあるね。(訳註——ベフラはラーヴァナとは全く関係なく、生きていた時代も全く違っていた。これは、如何いかに人間が全然関係のないことに流されてしまうかを示したインドのことわざである)

シャンブーも言っていた——『病院と施療所を建てたい』と。信仰者だった。だから、わたしは言つたよ——『至聖かみにかみ対面したら、病院と施療所をお願いするつもりか！』とね。

ケーシャブ・センが、『なぜ私は神を覚れないのでしょうか』と聞くので、言つてきかせたよ。人望とか学問とかいうもので忙しがつているから覚れないのさ。子供がおしゃぶりで遊んでいる間は、母親は放つておく。子供の好きそうな赤いおしゃぶりだ。しばらくして、おしゃぶりに飽きてぶん投げて泣き声をあげると、母親は料理中の鍋まで火から下ろして駆けつける。

お前は調停の仕事をやっている。大実母は思つてるよ——『あの子は、わたしの調停のおしゃぶりで機嫌よく遊んでる。まあ、あのままにしておこう』とね」

イシャンは、ずっとタクルの御足にさわりながら坐っている。御足を手にとりながら、うやうやしい態度で言う——「私は、したいと思つてしているのではないのです」

〔欲の根源はマハーマーヤー——だから必死に仕事をする〕

聖ラーマクリシュナ「そりゃ知つてるよ。それが大実母の遊びなんだから！ あの御方の遊戯なんだ！ この世にしばらく置いて置くことが、あの大現象力の意志なのさ！ どういうものかわかるかい？ この世の海に数知れず、浮く舟もあり、沈む舟あり。それから、いく十万の風のうち、一つ二つが切れて飛び、マーは手を拍ち大笑い！ 十万人に一人か二人、自由になれる。残りはみんな、マーの希みの世につながれているのさ——。」

かくれんぼ遊びを知つてるかね。鬼婆の意志で遊びはつづく。みんなが鬼婆にさわつてしまえば遊びはおしまいだ。だから、皆にさわられるのは鬼婆の意志じゃない。



それからほら、大きな穀物商の店では米が山ほどおいてある。部屋の天井に届くほどの米だ。米もあるし、豆だって沢山ある。だからネズミよけに、店ではふくらし米や甘くした米をのせた皿を置いておく。甘味や匂いにひかれてネズミはその皿のそばに行つて、米の大きな山の方には気がつかないんだよ！——人間は女と金に溺れているから、神さまの消息がわからない」

### 聖ラーマクリシュナの諸欲の捨離テヤグ——ただ信仰欲だけ

聖ラーマクリシュナ「ラーマがナーラダにおつしやつた——『何か願いごとを叶えてあげよう』と。ナーラダは言いなすつた——『ラーマ！ 私に今さら、何の不足がありませんか？ 何の希のぞみがありますか？』でも、どうしてもとおつしやるなら、あなたの蓮の御足みそとに対して、純粹な信仰をもちつづけられますように——。それから、あなたの世にも魅惑的なマーヤーに溺れませんか——』ラーマは、『何かほかの希のぞみを言え』とおつしやつた。するとナーラダは、『ラーマよ！ この他に私は何も希のぞみません。ただ、あなたの蓮のみ足に純粹な信仰をもちつづけられますように、ただ、それだけです！』

わたしはマーにお祈りしたものだよ、こう言つてね——『マー！ わたしは名声など欲しくない。マー、八大神通力もいらぬ。マーよ！ 百の通力もいらぬ。楽な生活もいらぬ。ただ、こうしておくれ、あなたの蓮華の足に純粹な信仰を持つていられるように、マー！』

アディヤートマ(ラーマヤナ)にあるが、ラクシュマナがラーマにこう質問した——『ラーマよ！ あ

なたは、いくつの霊的状态すだてと相で見れるのですか？ どうすればあなたを見分けることができるのですか？」ラーマは答えなすつた。「弟よ！ これをよく憶えておけ。法悦ウールジク・バクティの信仰のあるところにわたしは必ずいる」法悦ウールジク・バクティの信仰をもつ人は、笑ったり、泣いたり、踊ったり、歌ったりする！ もし誰かがそういう信仰を持っているなら、間違いなく神そのものがそこに現在している。チャイタニヤデシヤ様がそんなふうだった」

信者たちは驚いて、声もなく聞いていた。神の啓示のように思つて、一言も聞き逃さず聞いていた。あるものは考えた——タクールは、「愛に笑い、泣き、踊り、歌う」とおっしゃったが、これはチャイタニヤデシヤ様の境地だけではない、タクールもこの境地だ！ だから、ここに神ご自身が現われているのでは？

タクールは甘露したたる言葉をおつづけになる！ ニワリツティ 離欲の道についての話である。イシャンに向かつて真剣な声でお話になっている。その話が続けているのだ。

「おべつか使いについてイシャンへ忠告」

聖ラーマクリシュナ「(イシャンへ) お前、おべつか使いの言葉を聞いて、いい気になっちゃだめだよ。おべつか使いは、俗人を見ると寄りたかってくるんだ！

牛の死骸があるとハゲタカが群がってくる」

〔ただ神の蓮の御足を想え〕

「俗人には中身がない。まるで牛の糞だ！ おべっか使いがやってきて、『あなた様は情深くて、智者で、しかも瞑想までなさる』なぞと言う。ただの言葉じゃない——あれは竹槍だ！ 何て愚かなことだ！ 世俗的なバラモンの学者をいつも周りにおいて、年中お世辞を聞いているとは！（訳註、竹槍——本人にとつては危険であり、時には致命傷をうける）

俗人は三つのものの奴隷だから、主体性などあるわけがなからう？ 細君の奴隷、金の奴隷、雇い主の奴隷だ。ある人で——名前は言えないがね——八百ルピーの月給取りだが、細君の奴隷でね、立てと言われれば立つ、坐れと言われれば坐る！ 調停だの、指導だの、そんな仕事が何になる？ 慈善か？ 社会奉仕か？——そんなこと、もう充分やったじゃないか！ そういうことをする人は、別の段階の人だよ。お前さんはもう、神の蓮華の御足に心を捧げきる時期になったんだ。あの御方にふれたら、すべてのことは解決する。先ず第一にあの御方のこと。そのあとで慈善、社会奉仕、世界への貢献、人類の救済。お前が今そんなことをして、役に立つと思っているのかい？

ランカーでラーヴァナが死んだら、ベフラが悲しんで泣いた。

これが、今のお前の状態だよ。誰か完全に欲を捨てた人が、『こうこうしろ！』とお前に言ってくる、大そうたぬ為になるんだがなあ！ 俗人の忠告は見当ちがいだ。たとえバラモンの学者でも、ほかの人でも——」

「イシヤンよ、狂え——これが大実母<sup>マ</sup>の教え」

「気狂いになれ、神の愛に狂ってしまえ！ 人に、イシヤンは気狂いになったから、もうダメだ」と思わせる。そうすりゃ、もう調停だの指導だのをさせに、お前のとこに来ないだろう。コーシヤクシ（礼拝用銅器）なんか捨ててしまつて、イシヤンの名の通りになれ」（訳註、イシヤン——名前の語源はイシヤナで、完全に捨てた<sup>レ</sup>という意味でシヴァ神の別名でもある）

イシヤン「マーよ、私を狂わせておくれ！ 智慧も分別も用はない」（訳註——歌の文句を引用している。一八八四年十月十九日にその歌あり）

聖ラーマクリシュナ「それだ、それなんだよ。ほんとに気狂いになると思ふかい？ シヴァナートが、『あんまり神のことを考えるとバカになる』と言うから、わたしは言ったよ——『何だつて！ 誰が意識そのものを想つて無意識になるんだい？ あの御方は永遠不変の純粹知覚だ。あの御方の知覚ですべてのものは知覚し、あの御方の意識で一切のものは意識に満ちているんだよ！ 西洋人で気狂いになった人がいるというんだ——あまりその（神の）ことを考え過ぎて、頭がおかしくなつたんだとさ。そりゃそうかも知れん。でもあの連中は、この世の事を考えているんだから——。ほんとうに神を覚つた人はこうだ——身も心も法悦に満ちて意識薄らぐ！ こういう場合の意識は、外界を知覚する意識のことだ」

タクール、聖ラーマクリシュナの御足にさわりながら、イシヤンはタクルの言葉を一言もさらず聞いている。時々彼は、寺の中央に安置された玄武岩のカーリー像の方を見やつてゐる。ランプの明

かりに照らされて、マーのお顔は笑っているように見え、タクール、聖ラーマクリシュナのお口から発せられたヴェータの真言そのままの言葉をきいて、喜んでいらつしやるかのようだ。

イシャン「(タクールに) あなた様の尊いお口で語られた言葉はみな、たしかにあそこ(カーリー像)から出てまいります」

聖ラーマクリシュナ「わたしは道具、あの御方が使い手。わたしは部屋、あの御方が住み手。わたしは馬車、あの御方が馭者<sup>ぎよしゃ</sup>。あちらさんのさせる通りにわたしはする。言わせる通りにわたしは言う。現代のような末世<sup>かりよが</sup>では、天からの声(神の啓示)は聞きとれない。あの御方は、子供か、気狂いのような人間の口を通してお話になる。

人間がグルになることはできない。神様のご意志ですべてが起こる。極悪の罪、長い間の罪、長い間の無智、そうしたのも、あの御方の恵みがあれば瞬き<sup>まばた</sup>一つする間に消えてしまう。

千年のあいだ暗闇だった部屋に明かりが入ったら、その千年の闇は少しずつ消えて行くか、それとも一瞬の間に消えるかい? もちろん、光に会えば、全ての闇はたちまち消える。

人間が何をしようのかね。人はあれこれ喋り、いろいろするかも知れん。だが、終着<sup>さいちゆう</sup>はすべて神の手にある。弁護士が言うだろう——『私として、言うべきことはすべて陳述いたしました。今後は裁判長のご一存であります』と。

ブラフマンは無活動だ。それが、創造、維持、破壊のような仕事をなさるとき、あの御方をアディヤシャクティと呼ぶ。そのアディヤシャクティは喜ばさなけりやいけないんだよ、チャンディー(聖

典『デーヴィー・マハートミヤ』に書いてあるの、知ってるね？ 神々は先ず、アディヤシャクティに對して讃詞を捧げなすつた。あの御方が喜ぶと、ハリはヨーガの眠りから覚めるんだよ」

イシャン「はい、仰せの通り、悪魔マドウとカイタバを殺すとき、ブラフマーはじめ神々は讃詞を捧げて――

あなたはスヴァアーハー、あなたはスヴァター

あなたはヴァシャット、あなたは音声

不滅の甘露、不変の二音節、三重の音素(オーム)

三種の音素のなかの半音に常住す

(訳註2) これは『マールカンデーヤ・ブラーナ』の一部で、『デーヴィー・マハートミヤ』として独立した聖典とされるが、「チャンデー」の名前でよく知られる。掲載した詩は、デーヴィー・マハートミヤ第一章54・57の引用。一八八二年八月二十四日に一部掲載があるが、『平凡社 東洋文庫<sup>677</sup> ヒンドゥー教の聖典二編(ギター・ゴーヴィンダ、デーヴィー・マハートミヤ)』を参考に、田中先生の翻訳に一部修正を加え、解説についても同書より引用した。スヴァアーハー――神々に供養を捧げる時、各マントラの最後になえる音節。スヴァター――祖先靈に供養する時となえる音節。ヴァシャット――一番最後の供養の前になえる音節。二音節――スヴァアーハー、スヴァター、ヴィシャット、音声、不滅の甘露、これらの原語はすべて二音節の語である。三重の音素――AUMの三つの音素からなる語オームを指す。半音――オームはAUMの三つの音素と第四の音素をもたないものからなり、三音素がアートマンの三状態(覚醒、夢眠、熟睡)に対応するのに対し、この第四のものはアートマンがブラフマンと融合した状態に対応する。

あなたはサーヴィトリー(オームの女神)、あなたは一切の母なる神

すべてのものはあなたによって支えられ

宇宙世界はあなたによって創られる

あなたはすべてを維持し

あなたはすべてを食いつくす

創造するとき、あなたを創造者および

維持するとき、あなたを維持者および

破壊するとき、あなたを破壊者および

聖ラーマクリシュナ「そうだよ、それを自分でつかむことだ」

聖ラーマクリシュナと宗教儀式——カルマカーンダ宗教儀式は困難なので信仰のヨーガを

祭壇の正面で、信者たちは聖ラーマクリシュナを取り囲んで坐っている。そして、驚いた様子で、尊いお口から出る言葉に耳を澄ましていた。

やがて、タクールは立ち上がられた。お堂の正面の壇にすすみ、ひれ伏してマーを拝された。信者たちは皆、いそいでタクールの足もとにかけより、そこで同じようにひれ伏して参拝した。一同は皆、御足の塵を乞うた。皆に足を拝ませてやってから、タクールは壇上から下り、お堂を出て校長と話し

ながら自室へ向かわれた。

聖ラーマクリシュナ「(宗教歌を時々口ずさみながら、校長に向かつて)——

ブラサードは言う——

私は信仰バクテイと解脱ムクテイの両方に頭を下げる

カーリーはブラフマンおなじに不異と知って

ダルマ 正と不正のすべて捨てる

ダルマ 正、不正とは何だか知ってるかい？ ここでいう正は、ダルマ 聖典にこうしろと書いてある宗教的行事のことなんだよ。布施をする、死んだ人の供養儀式、乞食に食を与える、といったようなね。

この宗教行事のことをカルマカーンダと言うんだ。この道はとても大変だ。ニシュカト、カヤ 無私の行為をするということはとても難しい！ だから、信仰の道をとれ、と言われてるんだよ。

ある人が家で先祖供養シューラツダを行っていた。大勢が振舞いにあずかっていた。そこへ一人の肉屋が牛を引いて通りかかった。肉屋はくたびれきっていて、牛をうまく引つ張ることができなかった。そこで彼は思った。あの先祖供養をしている家に行つてごちそうになろう。そうして、元気をつけてまた牛を引いていこう、と。結局、その通りになった。しかし彼が牛を殺したとき、先祖の供養をしていた人も、牛殺しの罪の片棒を担いだことになった。



だから言うのさ、宗教儀式カルマカーンダより信仰の道の方がいいと——」

タクールは部屋にお入りになった。校長も従った。タクールは何か、鼻歌を口ずさんでいらっしやる。先ほどの完全離欲ニツリフテイについてのことが、何かそこに盛込まれているようだった。口ずさみながら、こんなことを歌っておられる——「これだけ残してくれたらいいよ、ねえ、マーよ、骨の首輪と大麻の壺（二つともシヴァの持ちもの）」

タクールは小寝台にお坐りになった。アダル、キシヨリー、その他の信者たちが入ってきて坐った。聖ラーマクリシュナ（信者たちに向かつて）イシャンに会ったが——まったく（靈的）成長が見られない！ どういうわけだろう？ プラスチャラナを五ヶ月もやったのに！ ほかの人なら、少しはどうかなるだろうに——」

アダル「私どもの前で、あの方にあそこまでおっしゃるのはよくないのでは——」

聖ラーマクリシュナ「どうして！ 彼は称名好きだ。あれくらい、何でもないだろう？」

すこし話をしたあとで、タクールはアダルにおっしゃった——「イシャンはとても情深い。それにほら、称名ジャバや苦行もしているし——」

タクールは何ほどか黙っておられる。信者たちは床に坐って、ただ師の方だけを見つめている。

突然、タクールは声をあげてアダルにおっしゃった——「お前さんたちは、ヨーガとボーガの両方とも持っている」（訳註、ヨーガ——神との合一、ボーガ——世俗の楽しみへの執着）